霧埼劉間の事件簿―合宿殺人高校篇―

春馬令

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霧埼劉間の事件簿―合宿殺人高校篇―

【Ｎコード】
Ｎ１７９０Ｎ

【作者名】
春馬令

【あらすじ】
なんか、面倒な探偵の話しです。でも、僕の気持ちは、拙い文章にこめられています。どうか、何かを感じてください。

やぁ！初めまして、僕の名前は霧埼劉間（きりさきりゅうま）よろしく。まずは自己紹介。僕は２５歳の男。独身です。んで、仕事は私立探偵。もともと推理小説が好きで、この仕事に就いた。思ったよりも仕事が多く、まぁまぁ繁盛してる。今日はそんな仕事の中で一番厄介だったのを話そうと思う。時間があれば、最後まで・・・、いや、犯人の動機くらいは、聞いていってほしいな。それでは、始まり・・・。

『霧埼劉間の事件簿―合宿殺人高校篇―』

８月３日。僕のところに一報があった。通報しのは近くの民宿『富』さん。なんでも、合宿のために泊まりに来ていた高校の中で、殺人がおきたらしい。僕個人としてはそういったケースは警察に通報したほうがいいと思うんだけど、高校側としたら大げさにしたくないらしい。まっ、殺人ってことが普通じゃないから、大袈裟も何もないんだけどね。

僕はその日のうちに富に向った。

「探偵さん、どうにかしてくださいよ・・・」

富の女将さんが心配そうな表情で出迎えた。もう慣れたとは言っても、この空気は嫌いだな。

「どうしましたか？」

僕は高校のテニス部の顧問に事情を聞いた。

「実は、昨夜に事件はおきました。２０３号室の部屋にいた、松坂裕香（まつざかゆうか）さんと黒峰桜（くろみねさくら）の部屋で自殺があったんです」

「松坂さんと、黒峰さんのどちらが？」

「松坂さんです。その前の日から、黒峰さんには悩みを相談していたそうなんですが・・・」

「悩み？」

当然、そこは気になる。この事件が自殺か他殺かは、それを聞いてからだ。
「はい。毎晩同じ夢を見ていたそうなんです。まぁ、同じ夢とはいっても、階段を、一段一段のぼっていく、というものなんですが・・・」
「階段を、のぼる？」
「最初は5段。次の日は4段、そして3段、2段、そして、1段。それが、計算からいうと、昨晩なんです」
分からない。夢は偶然なのか？
「彼女は、どのように死んだ、失礼、亡くなったのですか？」
「部屋の窓を開けて、飛び降りたと・・・」
「自殺、ですかね？・・・とにかく、同じ部屋にいた、黒峰さんに聞いてみます。朝から申し訳ございませんでした。練習、頑張ってください」
部活の仲間が死んだ翌日も練習をするのはどうかと思うが、それは高校の方針なので何もいえない。
僕は、練習をしていた黒峰さんを受付近くのソファに呼んだ。練習の途中とわかる服装。ラケットを持ったまま、ソファに座った。
「練習中に申し訳ございません。少し、聞きたいことが」
「分かってます。彼女の、裕香の、夢についてですよね？」
彼女は凛ととして答えた。もう、何回も聞かれているかのような対応だ。警察には通報してないみたいだから、何も聞かれていないはずだけど。
「いえ、今回は、違うことで・・・。彼女、テニスは強かったですか？」
「え？・・・はい。確かに強かったです。ベンチの私とは天と地ほどの差です。まさか探偵さん、私を疑っているんですか？同じ部屋だからって、殺しはしませんよ」
「そうですよね。いや、簡単な質問です。ありがとうございました。どうぞ、戻ってください」

僕は丁寧に謝った。だがその一瞬一瞬の彼女の動きをきちんと見て。
「はい・・・」
彼女はソファから立ち上がり、戻ろうとした。
「あっ、もう1つ。貴女は、彼女のことを尊敬していますか？」
「はい」
「そうですか、ありがとうございました」
彼女は少し悲しい顔をみせて、駆け足でいった。
「さて―」
僕は深くソファにかけなおすと、目を閉じた。
―今のところ自殺とは思えない。犯人率が一番高いのは、やっぱり彼女だ。だけど、夢というのが気になる。もしかしたら、別の方法でころしたのか？あの顧問の先生と松坂さんには何か関係が・・・。ん？彼女は・・・―　「さて―」
その言葉でそこにいた黒峰さんと顧問は生唾を飲み込んだ。
「まず、断言できる事があります。松坂さんは他殺です」
「他殺・・・？」
「・・・・・・」
黒峰さんが、反応を示し、顧問の先生は黙ったままだ。やはり、予想通り。問題は、この後。
「では、殺人の方法を教えましょう」
「待ってください。この中に犯人がいるっていいたいんですか？私か、先生のどちらかが・・・」
「はい。僕は、自分から名乗りでるのを待ちますよ」
僕はす断言して推理を続けた。
「皆さんは、催眠術というものをご存知でしょうか？あれは難しそうで、実は簡単なものならすぐにできるのです。そう、夢を見させることもね・・・」
僕は雰囲気作りのためにここで少しの間を置いた。
「毎日寝ている人の横で囁けばいいのです。『5段』『4段』『3段』・・・とね。そうすれば、相手は階段をのぼる夢をみます。こ

れは、今回の事件でも使われています。松坂さんが寝始めたのを見計らって・・・。彼女はその夢に悩まされた。そしてついに、夢が現実になりました。寝ている途中で勝手に体が動き始めたのです。それこそ、無意識に・・・ね」

「・・・・ふざけるな」

「？別に、ふざけた覚えはありませんが」

僕の推理を止めたのは顧問の先生だった。

「だったら、犯人はなぜそのようにしたんです？そんな時間のかかることをしなくても・・・。動機は？」

「僕には、理由はわかりますが、動機は分かりません。動機は、そうですね、犯人に話してもらいましょうか・・・。まずは理由です。犯人は、その手が血で汚れるのがいやだった、とでもいいましょうか？そうすれば、時間はかかりますが、自分は罪に問われない。そうでしょう？」

「・・・探偵さんの、言うとおりです」

来た・・・。僕はゆっくりと眼を閉じた。

「やっと言ってくれましたね。犯人は、貴女です。黒峰桜さん！」

「なぜ・・・、黒峰が・・・？」

顧問の先生は、信じられないように、呟いた。

「レギュラーが欲しかったんです。ずっと、あの席に座っていた松坂を・・・見返してやりたかった・・・！」

「そんな、理由で・・・。お前と松坂は、仲がよかったじゃないか・・・！」

「仲がいい？そんなの、嘘よ！あいつは、私を見下していた・・・！」

その声は、憎しみにあふれていた。

「さてと・・・言い訳は、ムショの中でいいましょう。すぐに警察がここにきます。僕は、解決をしただけです。まぁ、仮に罪を与えるならば・・・。生き刑に処します。では・・・」

泣いている彼女を横に、僕は事務所に帰りました。

後日、僕のところには礼金が。探偵業を営めば、こういったケースの事件にも出会います。しかしなぜか分からない。なぜ、簡単な理由で人を殺すのか？まぁ、答えは決まっているのでしょうけど・・・。僕が思うに、

「『やりたいから、やっている』んでしょうね・・・」

でも、探偵は、誰も幸せにできない。解決するだけ。そんな考え、僕だけでしょうか？

以上で、終了です。拙い文章ですたが、どうでしたか？何かを感じとっていただければ光栄です。最後に１つ。殺人は、いけませんよ・・・。

『霧埼劉間の事件簿―合宿殺人高校篇―』―（完）

（後書き）

えっとぉ・・・。正直、つまらなかったと思います。でも、こお文は、最近のＴＶを見てもかんじました。『殺人は、いけません』僕が伝えたいのは、これです。つまらなかったでしょうから、最大限の感謝を送ります。

『ありがとうございます』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1790n/

霧埼劉間の事件簿―合宿殺人高校篇―

2010年10月11日13時18分発行